

物語と解放

カメル・ダーウド『ムルソー再捜査¹』について

鈴木 和彦

1. 物語と歴史

現代アルジェリア文学を代表するカメル・ダーウドの小説 *Meursault, contre-enquête* (2014 [2013]) には、*histoire(s)* という単語が 92 回も用いられている。原書では 150 頁に満たない本文において、この語は満遍なく、執拗に反復されている。本文を待たずとも、エピグラフに引かれたシオランの警句 —— 「犯行時刻は諸国民にとって同時に鳴るわけではない。かように歴史 (*histoire*) の不変性は説明されるのである (7) 」 —— はすでに、以下に続くストーリーがこの述語をめぐって展開されるであろうことを仄暗く予告している。

histoire は「物語」とも「歴史」とも訳されるが、カメル・ダーウドの関心は、その不可分な両面に等しく向けられている。「物語」という側面に関しては、この『ムルソー再捜査』という小説が物語に囚われた物語であること、いわば「物語の物語」であることをはじめに指摘しておきたい。

『ムルソー再捜査』は、アルベール・カミュの小説『異邦人』においてムルソーに殺された「アラブ人」の名が記されていないことへの異議申し立てから生まれた小説である。作者のダーウドはこの「アラブ人」をムーサーと名づけ、さらにムーサーの弟ハールーンを創作し、彼を小説の語り手に据えている²。

¹ カメル・ダーウド『もうひとつの『異邦人』—— ムルソー再捜査』鶴戸聡訳、水声社、2019年。小説からの引用はこの訳書に拠り、括弧内に頁数を記す（論旨に応じて訳語を一部変更した）。ただし本稿ではこの小説を、原題 (*Meursault, contre-enquête*) に鑑みて『ムルソー再捜査』と呼ぶことにする。

² 『クルアーン』において、ハールーンとムーサーはいずれも預言者の名であり、彼らは兄弟である（ただし『ムルソー再捜査』とは反対にハールーンが兄でムーサーが弟）。大予言者ムーサーは兄ハールーンを自身の補佐役とするようアッラーに求めるが、その理由はハールーンが自身よりも雄弁であるためである（「幸い兄のハールーンは私より言葉も巧みでござりますれば、どうか私と一緒ににお遣わしになって私の支えともなし、かつはまた私の言葉の保証人ともして下さりませ。彼らは必ず私を嘘つき者よと言い出すに相違ござりませぬ。」『コーラン（中）』井筒俊彦

ハールーンはマー（母親）とともに殺された兄ムーサーの痕跡を探すが、兄の遺体も事件の真相もついに見出されない。彼は、ムルソーが「アラブ人」を殺したように、マーの雇用主であったフランス人（ジョゼフ・ラルケ）を殺すことで、物語はにわかには『異邦人』の反転した「リメイク（122）」の様相を帯びてゆく。

ハールーンをはじめ、本作の登場人物はみな、1942年にカミュが発表した物語の延長線上に生きている。作中には登場しないものの、むしろそこではムルソーも実在の人間であり、今日われわれが『異邦人』として知る小説もまた、他ならぬムルソー自身がみずからの犯行を綴った自伝的著作『もうひとり』（*L'Autre*）として存在している。つまり本小説では、『異邦人』の物語世界がまったき現実として生きられているばかりか、その内部にこの書物（『もうひとり』）が入れ子状に組み込まれることで——さらにはアルベール・カミュその人と思しき「酒瓶の亡霊」なるものの存在によって——現実と虚構が截然と区別できない重層的な関係を取り結んでいる。

もうひとつ忘れてはならないのが、語り手（ハールーン）と読者の関係である。本作では、われわれ読者はハールーンのいるオランのバーを訪ね、彼の話の聞いているという設定になっている。これはカミュの『転落』における語り手クラマンズと読者の関係性を踏襲したものだが、読者を物語世界に召喚する語りの手法もまた、現実と虚構を通底させる機能を有している。この点については、本稿の結びであらためて論じることになるだろう。

さしあたり、本作のこうした結構には、「物語」とは単に読まれるものでなく生きられるもの、すなわち「生を与えるもの」というテーゼを読み取ることができる。語り手のハールーンは、ムルソーによって殺された兄の尊厳を回復するためにこの物語を語るのであり（「僕は兄の不条理な死を拒絶し、兄に与える屍衣として物語を必要としていたんだ（36）」）、彼が殺された兄にムーサーという名を与えることは、兄に生を与え直す行為に他ならない（「死者に名前を与えることは、生まれた子にするのと同じくらい重要なことなんだ（38）」）。

以上の点からも垣間見えるように、カメル・ダーウドにおいて、「物語」はわれわれの生と根源的に関わる、なにか独特な手触りを秘めている³。『異

訳、岩波文庫、2009年、297頁）。のちに見るように、本小説においてハールーンはきわめて雄弁な語り手であり、彼が言葉を持たない亡きムーサーの代弁者の役を担うことは、聖典の記述と無関係ではない。

³ ダーウドの2作目の長篇小説『ザボル』（2017）についても同じことが言える。本作の主人公ザボルは、他人の物語を書くことでその人間の寿命を延ばすことのでき

邦人』の世界を読み直すのではなく「生き直す」ことを求めるこの小説の扉を開くとき、われわれは「物語とはなにか」というきわめて文学的な問いを、どこまでも身体的に突きつけられることになるだろう。

他方、「歴史」としての *histoire* に対するダーウドの関心については、作家として名を成す以前から、アルジェリアをはじめとするアラブ世界の病理を舌鋒鋭く批判し続けてきたジャーナリストとしての側面を想起したい⁴。ここでは彼の歴史観に深く立ち入る余裕はないが、アルジェリアとフランスの関係をめぐって彼が同胞に向けてたびたび発する、永遠の被害者という立場がもたらす恩恵——小説の言葉で言えば「悪い愉しみ、終わりなき喪の愉しみ(57)」——を享受し続けるのではなく、真の和解のためには現在を直視せねばならないというメッセージは⁵、ひとえにこの两国のみならず、あらゆる旧宗主国と旧植民地の未来に光を投げかけているようにも思われる。

本稿の議論に話を戻せば、「旧宗主国と旧植民地の関係をどうするか」という問題は、『ムルソー再捜査』においても重要な位置を占めている。というのも、本作においてハールーンがジョゼフを殺害したのは1962年であり、ムルソーによるアラブ人殺し(本作では1942年の出来事とされる)とハールーンによるフランス人殺しの間には、解放戦争(1954-62)およびアルジェリア独立(1962)という歴史の転換点が存在しているからである。

アルジェリアにおけるフランス人とアルジェリア人、入植者と「原住民」、ムルソーと「アラブ人」の力関係は、62年の独立を境に逆転することとなる。『異邦人』の世界を隅々まで反転させた本作の試みは、この歴史的転換と軌を一にするものである⁶。だが見誤ってはならないのは、この『ムルソー再捜

る神的な能力を授けられている。ここでもやはり、物語(虚構)は現実の対極に位置するのではなく、われわれの生に直接的に働きかけるものとしてある。

⁴ アルジェリアの『オラン日報』に掲載されたダーウドのコラムの一部は以下にまとめられている。Kamel Daoud, *Mes indépendances. Chroniques 2010-2016*, Arles, Actes Sud, 2017.

⁵ たとえば以下を参照。Kamel Daoud, « La mémoire est aussi un fétiche », *Le Point*, 19 septembre 2019, p. 154.

⁶ 著者自身、こうした関係性の反転が本作執筆の契機のひとつとなったと述べている。「私は文学において『異邦人』を正確に「反転」させてみたかったのです。2冊とも文字数までほとんど同じです。この本には反転した双子という主題もあります。さらに言えば、私には時折アルジェリアに戻ってくるフランス人たちの様子が強く印象に残っていました。どこまでも控えめに、存在感を消そう消そうとする彼らの様子は、『異邦人』に描かれたアラブ人たちの肖像そのものだと思ったのです。私は興味深く観察しました。要するに歴史が状況を反転させてしまったわけです。」Hassina Mechaï, « Kamel Daoud, sur les traces de Camus », *Le Point*, 28 septembre 2014. https://www.lepoint.fr/culture/kamel-daoud-sur-les-traces-de-camus-28-09-2014-1867354_3

査』という小説は、以上の議論が容易に想像させるような「旧植民地の旧宗主国に対する復讐劇」ではまったくくないという点である。このことについてサラ・ホートンは、「ハールーンによるジョゼフ殺害は、被支配者が支配者を殺すという既成のナラティブには当てはまらない⁷⁾と繰り返し強調している⁸⁾。われわれもまた、われわれなりの方法でこの点を確認するために、本作の語り手であるハールーン自身の言葉を導きの糸としてみたい。

これはありきたりの赦しや復讐の物語じゃなくて、ひとつの呪い、畏なんだ(123-124)。

ハールーンは兄の仇であるムルソーへの怨恨を抱えている。この怨恨は彼に固有のものである一方、「フランス人によるアラブ人殺し」という事件の性質上、植民地が宗主国に対して抱える怨恨と無縁のものではあり得ない。その意味において、彼の言う「物語」は「歴史」と置き換えることができる。しかし、いずれの尺度においても、この *histoire* において問題となるのは「赦しや復讐」ではないと彼は断言している。フランス文学上最も有名な「物語」によって、そしてまた、1830年に遡るフランスとの長い「歴史」によって、二重に不条理な生を課されたハールーン。そんな彼が「赦しや復讐」とは別な何かに読者の注意を向けようとしていることを、最初に確認しておく必要がある。

われわれは、彼の言葉に耳を傾けることから始めたい。すなわち、「赦しや復讐」といった問題系ではなく、彼が「呪い」や「畏」と呼ぶものの内実に迫ってみたい。すでに述べたように、『ムルソー再捜査』は現実と虚構、歴史と物語が複雑に絡み合った小説である。両者は相反するものでもなければ同一視できるものでもない。ムルソーに対峙するハールーンの物語を読み解くために、そしてあるいは、フランスに対峙するアルジェリアの歴史を読

.php#xtmc=sur-les-traces-de-camus&xtnp=1&xtr=2 (最終閲覧日 2021年4月6日)

⁷⁾ Sarah Horton, « Solidarity and the Absurd in Kamel Daoud's *Meursault, contre-enquête* », in *Journal of French and Francophone Philosophy. Revue de la philosophie française et de langue française*, vol. 24, n° 2, 2016, p. 294. <https://doi.org/10.5195/jffp.2016.733> (最終閲覧日 2021年4月6日)

⁸⁾ ヴェロニク・アルジェリは、ダウドの関心事は植民地時代をめぐる加害者と被害者の関係ではなく、いかにして「〈歴史〉の中に個人を復元するか」という問題であると正しく指摘している。個人と歴史の関係については本稿でも中心的に論じられることになるだろう。Veronic Algeri, « Le vertige intertextuel. Une lecture de Kamel Daoud, *Meursault, contre-enquête* », in *Revue italienne d'études françaises*, n° 9, 2019, par. 44. <https://doi.org/10.4000/rief.4512> (最終閲覧日 2021年4月6日)

み解くために、この似て非なるふたつの *histoire* のあわいに潜む「呪い」と「畏」に取り組むこと。以下はその試みである。

2. 屍体の重み

『ムルソー再捜査』は、「今日、マーはまだ生きている (9)」という冒頭の一文から、結末部における主人公と宗教家の長い対話にいたるまで、全編を通じて『異邦人』の引用やリライトに満ちた作品であり、かつてダーウドの前に「啓示⁹」として現れたというカミュへの敬愛に溢れる書物である。この点に関するかぎり、本作の語り手は著者の忠実な分身であると言える。ハールーンもまた、『異邦人』=『もうひとり』の作者に対する賞賛を隠そうとしない。

他のみんなみたいに、君もこの物語を、それを書いた男が語ったように読んだに違いない。こいつがあんまり上手く書いたものだから、その言葉はまったく正確にカットされた宝石みたいに見える。[…] あいつの書き方を見たかい？ 一発ぶっ放したって話をするのに詩の技法を使っているみたいだ (11) !

ハールーンがまず着目するのは、カミュ＝ムルソーの文体である。複合過去の使用や、装飾性を極力排した短文の羅列など、『異邦人』の語りの特異性は、刊行当時からサルトルをはじめ多くの批評家の注目を集めてきた¹⁰。ハールーンもまたその例に漏れないが、彼はこの「正確にカットされた宝石」に魅了されるあまり、それを我が物とするにいたる。『ムルソー再捜査』において彼がフランス人ジョゼフを銃殺する場面には、次の一文が読まれる。

それはまるで解放のとびらを短く叩く二つの音のようだった (119) 。

言うまでもなくこれは、『異邦人』におけるアラブ人殺害場面の忘れがたい一文（「それはまるで不幸のとびらを叩く短い四つの音のようだった¹¹」）の文体模倣である。オリジナルとパスティーシュを見比べると、「不幸のと

⁹ 「20歳の時に『カリギュラ』『反抗的人間』『異邦人』そして偏愛する『転落』を読みました。これらの本はひとつの啓示でした。」Alexandre Demidoff, « Kamel Daoud, l'enquêteur capital », *Le Temps Week-end*, 14 mars 2020.

¹⁰ 『異邦人』の語りの代表的な分析は以下にまとめられている。三野博司『カミュ「異邦人」を読む——その謎と魅力』彩流社、2011年、149-181頁。

¹¹ Albert Camus, *L'Étranger*, dans *Œuvres complètes*, t. 1, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2006, p. 176.

びら」（『異邦人』）と「解放のとびら」（『ムルソー再捜査』）という述語の異同が認められる。ハールーンの殺人が1962年7月5日、すなわちアルジェリア独立が公式に宣言された日に行われたことを踏まえると、彼の言う「解放のとびら」が個人と国家、2つの審級にまたがる意味を帯びていることは明白である。しかし、われわれの議論を先取るなら、ハールーンの解放とアルジェリアの〈解放〉は決して同期することはないだろう。そして、彼にとって「解放のとびら」が開かれる可能性は、まさしくこの2つの *histoire* の排反のうちに求められることになるだろう。

この点についてはのちに見るとして、両作品に描かれた殺害場面の比較を続けよう。われわれはここで、述語レベルの差異だけでなく、それぞれの作中において当該の一文が置かれた「位置」に目を向けてみたい。

『異邦人』の読者にとって、「それはまるで不幸のとびらを叩く短い四つの音のようだった」という文言が与える印象の鮮烈さは、これが小説第1部の掉尾を飾る一文であるという点に少なからず存すると思われる。それまで平凡な暮らしを送ってきた男の人生が、アラブ人との対決によって突如として山場を迎え、気づけば取り返しのつかない一線を踏み越えていたと悟るこの一文は、物語の展開上決定的な意味をもつ第1部第6章を締めくくるにふさわしい「決め台詞」には違いない。われわれ読者は、この一文のあとに広がる砂浜のような頁の余白に、銃声の残響とともに茫然と取り残されることになるだろう。「一発ぶっ放したって話をするのに詩の技法を使っているみたいだ！」とハールーンが評する所以である。

だが、「詩の技法」を手放しで賞賛できるわれわれ読者とは異なり、ハールーンはカミュ＝ムルソーに殺されたアラブ人の遺族である。彼は、美しく彫琢されたこの物語から、殺された兄ムーサーの存在だけがあたかも宝石の輝きを曇らせる不純物のように「カット」されていることを認めずにはいられない。事実、「それはまるで不幸のとびらを叩く短い四つの音のようだった」という一文をもって物語が殺人現場から尋問の場へすみやかに移行するとき、舞台上にあったはずの「死体は浜辺／頁 (*plage/page*) から消え去ってしまう¹²⁾」。

この点を踏まえて、上に引いた『ムルソー再捜査』の殺害場面を読み進めてみたい。

¹²⁾ 三野博司、前掲書、253頁。

それはまるで解放のとびらを短く叩く二つの音のようだった。少なくとも僕はそう感じたように思った。そのあとだって？ 僕が彼の屍体を中庭まで引っ張って行って、マーと一緒にそれを埋めた。死者を埋葬するのは、本や映画で見て思うほどたやすいものじゃない。屍体というものはいつだって生きてるときの二倍の重さになって、こちらの差し伸べた手を拒絶し、見境なく全体重をかけて地べたにへばりつくんだ。あのフランス人も重くて、僕らには時間が無かった (119)。

ハールーンは、兄ムーサーの命を奪ったムルソーへの意趣返しとしてフランス人を殺害するにいたるが、彼らの殺人には2つの違いがある。ひとつは、彼が殺害したフランス人に「ジョゼフ」という名を与えていること（「そこにはまたジョゼフ、僕の殺した男がおり (122)」）、そしてもうひとつは、ジョゼフには屍体があることである。引用の表現を借りれば、人を殺した者には、「そのあと」があるのだ。彼はここで、ムルソーが引き受けなかったものを引き受けている。死者に名を与えること、死者を埋葬すること。それはまさしくこの『ムルソー再捜査』という小説自体がムーサーに対して行っていることである。以上の点を踏まえるなら、「そのあとだって？」に続くハールーンの行為を、それを行わなかったカミュ＝ムルソーへの無言の糾弾とみなすことは難しくない。

だがこの埋葬の場面は、それとはまた別なことを物語っている。ジョゼフの屍体の重みは、ハールーンが背負っているもうひとつの重み、すなわち、彼に「殺されたアラブ人の遺族」として生きることを余儀なくしたカミュ＝ムルソーの「物語」の重みでもある。そしてまた、本稿のはじめにみたように、本小説において物語と歴史が表裏一体をなすことを思い出すなら、この植民者の屍体の重みは、この「生きてるときの二倍の重さ」は、フランス統治時代を脱してもなおその記憶から解放され得ずにいる今日のアルジェリアが背負う「歴史」の重みをも暗示しているだろう。

3. 物語と解放

問題は、いかにしてこの *histoire* に決着をつけるかということである。

物語と歴史。はたしてハールーンは、ジョゼフ殺害によってその二重の重みから解放されたと言えるのか。この問いに答えるために、小説冒頭の記述を読んでみたい。

今日、マーはまだ生きています。

彼女はもう何も言わない。でも、話そうと思えばいくらでも話すことができるだろう。この物語をさんざん繰り返したせいで、ほとんど何も思い出せなくなった僕とは正反対だ (9)。

小説の開始から、ハールーンとマーは対置されている。『異邦人』劈頭において、ムルソーとママンは「死」によって分かたれるが、『ムルソー再捜査』の息子と母は、「物語」あるいは「語ること」によって分かたれている。というのも、「もう何も言わない」マーとは対照的に、ハールーンはこの物語の語り手であり、それもきわめて饒舌な語り手であるからだ。

だが彼によれば、もう何も言わなくなったマーも、かつては息子に物語を語り聞かせてくれる母であったという。

子供だった僕は、長いあいだ、驚異譚の紛い物ひとつを夜に語ってもらえるだけだった。殺された兄ムーサーの話だ。それは母さんの機嫌次第で、その都度いろいろな形を取るのだった。[...] ありえそうもないことや、見えない巨人ムーサーが〈ガウリー〉やルーミー、汗と土地を盗み取った肥満のフランス人と取っ組み合いの闘いを繰り返す話まで。[...] 彼女は僕に殺人や死についてはひとつも描写することなく、おとぎ話のように変身させることで、アルジェの貧しい街区に生きるただの若者は、まるで救世主のように待ち望まれた無敵の主人公になった (29-30)。

マーが幼いハールーンに夜毎語り聞かせたのは、絵本のおはなしではなく、亡きムーサーの物語である。それが生前の兄の実話ではなく、母の作り話であることをハールーンは承知している。だがここで重要なのは、兄の物語の真偽よりも、息子を殺された母親がその耐え難い現実を書き換えるべく無数のフィクションを必要としたという事実のほうである。

彼女が嘘をつくのは、騙そうというつもりからではなく、現実を修正して、彼女の世界や僕の世界を襲う不条理を和らげようとするためだった (57)。

マーと同じく、ハールーンもまた殺された兄をめぐる現実を修正するために、この物語をわれわれに語っている。マリー・ポトー＝トラリの指摘にあるように、物語こそが不条理な世界を中和ないし補完する対抗言説となるこ

とを、つまり物語は現実を変えうることを、ハールーンはマーから教わったのである¹³。

「今日、マーはまだ生きている。彼女はもう何も言わない」。以上の議論を踏まえると、小説冒頭のこの一節は、マーが物語＝対抗言説をもはや必要としなくなったことを意味している。彼女は、フランス人殺害によって、すなわち復讐の成就によって、世界と和解することができたのである。

彼女はもう何も言わない。たぶん、もうムーサーの遺体のうち細切れにできるものが何も残っていないからだろう（60）。

ジョゼフの死によって、マーは物語から解放された。彼女にとって、現実のはもはや修正すべきものではなくなった。それはもう、亡きムーサーの幾多の英雄譚によって希釈すべきものではなくなった。かくして、事件後の法廷に立つ息子の前で——息子の弁護人である以上、最も口を開くべき場面で——「マーはようやく口を閉ざし（122）」たのである。事実、小説前半では主役級の活躍をみせていた彼女の存在感は、ジョゼフの死を境に著しく衰えてゆくことになる。

そんな彼女と比較してみるならば、ハールーンにとってジョゼフの死が「解放のとびら」を完全に開くものでなかったことはもはや明白だろう。なぜなら彼は、殺害の後もおも、口を閉ざすことなくわれわれにこの物語を語り続けるからである¹⁴。彼はまだ、世界と和解できない者だけがもつ特権にして責苦から、「物語」から解放され得ずにいる。復讐によって終わりを迎えたマーの物語とは異なり、彼の物語はやはり「赦しや復讐」とは別なものを必要としている。

ジョゼフ殺害によって、マーの物語は終幕を迎えたが、ハールーンの物語は終わることができずにいる。それはなぜか。この復讐劇が母と子にとって等しく意味を持つことに疑いの余地はない（この物語から「復讐など無意味

¹³ Marie Poteau-Tralie, « Fictionalizing Fiction through the Metaphor of (De)Construction in Kamel Daoud's *Merusault, contre-enquête* », in *Studies in 20th & 21st Century Literature*, vol. 43, iss. 2, article 39, 2019, p. 8-9. <https://doi.org/10.4148/2334-4415.2039> (最終閲覧日 2021年4月6日)

¹⁴ 全15章からなる『ムルソー再捜査』において、フランス人殺害の場面はその中盤にあたる第8章で語られる。2部構成の『異邦人』においても、アラブ人殺害の場面がその中盤にあたる第1部の末尾で語られていたことを想起するならば、ここにもまた対称性への配慮が認められよう。

である」といった「正論」を引き出すことはできない)。ただし、その意味内容はめいめいに異なっている。

というのも、実は僕はそのフランス人を午前の二時頃に殺したんだよ。そしてこの時から、マーはもはや遺恨のためではなく自然のままに老い始め、皺は彼女に千頁もの折り目をつけ、彼女自身の祖先たちはついに鎮まって、終わりに向かう最初の長談義のために彼女に近づくことが可能となったようにみえた。

僕については、何て言えばいいかな？ 人生がようやく僕に与えられたんだ。たとえ新しい屍体を引きずって行かなければならなかったとしてもね(111-112)。

復讐は、マーにとっては物語の終わりを意味するが、ハールーンにとっては物語の始まりを意味している。事実、彼はジョゼフ殺害の翌日を「世界で初めての一日(130)」と呼ぶ。だとすれば、ここから先の議論は以下の問いを念頭に進める必要があるだろう。すなわち、ムーサーをめぐる物語がひとまずの決着をみたいま、ハールーンはようやく与えられた自分の人生をどう生きるのか。彼は、彼自身の物語をどうするのか。

われわれはここで『ムルソー再捜査』を一旦離れ、ダーウドの短篇小説「ニグロの序文」(2008)を紐解いてみたい。この作品は、ハールーンの物語の行く末を見届けるうえで、彼の言う「呪い」や「罨」とは何かを考えるうえで、ひとつの有益な視座を提供しているように思われるからである。

4. 「ニグロの序文」から

「ニグロの序文」の語り手である「僕」は、「ニグロ」であり、代書人である。彼はとある非識字者の老人の家に通い、この老人が口述する「物語」を筆写している。老人は20歳でフランス軍に従軍したが、解放戦争では祖国アルジェリアの側に立った退役軍人であり、現在はかつて植民者が暮らしていた住居で余生を過ごしている。

非識字者である老人と識字者である「僕」、彼らの関係を基礎づけているのは、世代間の交感ではなく隔絶である。老人は、教育を受ける権利を剥奪され、ペンの代わりに銃を手に生きることを余儀なくされたフランス統治時代への怨恨を抱えている。そして、旧植民者が去ったいま、彼の怨恨は独立後にこの国に生まれ、教育を受けて育った「僕」の世代にその矛先を向け直

している（「今のお前らが偉そうに読み書きできるのは、俺たちがお前らのために犠牲になったおかげなんだ¹⁵」）。

他方「僕」にとって最も耐え難いのは、老人の転移したルサンチマン以上に、彼が自分自身の物語を書く権利を持たないという点である。この点について彼は述べる。

僕のネグリチュードは、彼[老人]にとって何より黒い色であるにとどまらず、目に見えないということ（*invisibilité*）に及んでいるに違いなかった。もうひとつの不幸、僕の不幸は、まさしく僕自身の本を決して書けなかったという点にあった。ついに物語を書ける日が来たというのに、それは僕の物語ではなく、ある嘘つきが主人公の、馬鹿げた戦争の名のもとに出版されねばならない物語なのだった¹⁶。

本作における老人と「僕」の関係は以下のように要約できる。老人は書くべき物語を有しているが、物語を書くことができない。対する「僕」は物語を書くことができるが、書くべき物語を有していない。ヘーゲルの言葉を借りれば、彼らの間では「なされたこと」（*res gestae*）と「なされたことの物語」（*historia rerum gestarum*）が、あるいは歴史と物語が、決定的な仕方で見分けられたまま、前者が後者を待望している状態にある。

老人と「僕」の関係は相補的であり、ここに両者の、とりわけ「僕」の葛藤がある。なぜならこの国において真に書かれるべき物語、アルジェリアが体験した唯一の歴史とは解放戦争のそれであり、独立後に生まれ、学齢期よりこの掟を刷り込まれた「僕」—— 1970 年生まれの作者ダーウドの分身としての —— は来るべき書物の著者ではなく、その「代書人」たることしかできないからである¹⁷。FLN（民族解放戦線）によって「唯一の英雄は国民

¹⁵ Kamel Daoud, « La préface du nègre », *La Préface du nègre, le Minotaure 504 et autres nouvelles*, Arles, Actes Sud, 2015, p. 59.

¹⁶ *Ibid.*, p. 70.

¹⁷ 「ある日突然僕は思い出したんだ。小学生のころ、幼い僕の頭上でけたたましく響いていたこの言葉を、レコードのように復唱させられていたことを。この国の歴史（*histoire*）は一冊の本であり、それは存在しうるすべての本であり、すべての本を物語るこの歴史なくしてどんな歴史もあり得ないということ。」（*Ibid.*, p. 65）解放戦争の歴史はこの国が経験した唯一の歴史である —— 「ニグロの序文」においてある種の諦念とともに繰り返されるこの認識は、ダーウドの誇張ではない。歴史家のアマル・モハンド＝アメルによれば、「国家解放戦争の歴史は一種の超歴史（*supra-histoire*）であって、独立以降、この歴史がアルジェリア史における他の時代の影を薄くしている」のであり、今日アルジェリアの教育制度では小学 3 年から早くも学習対象となる解放戦争の歴史は、ひとつの「国民小説」の創出に寄与してい

である」 (*Un seul héros, le peuple*) という結語を公式に刻まれたこの戦争の *histoire* において、遅れてきた「僕」が主人公 (*héros*) たる余地などあらかじめ用意されていないのだ。

以上の議論を踏まえると、「僕」が「ニグロ」を自称するとき、この語に賭されているのは白人文化に抗して自己のアイデンティティを声高に主張するネグリチュードではもはやない。対立は植民者と「原住民」ではなく、旧「原住民」とその子孫の間に生じている¹⁸。そしてこの新たな対立において、エメ・セゼールとは異なる時代と地域に生まれた「僕」を特徴づける黒さは、「拒否」の色から「不在」の色へと惨めな撤退を迫られている。「僕」のネグリチュードが意味するのは「目に見えないということ」 (*invisibilité*)、換言すれば、歴史の代書人たる宿命を背負わされているがゆえに、エクリチュールの舞台上で自己表出の権限を持たない黒衣としてのアイデンティティに他ならない。

「この国の唯一の歴史から逃れることなど不可能だと気づいたのだ」、「この戦争の物語とは違うものを書くこと、これに抗って書くことなど不可能だと気づいたのだ」、「たとえば単なる恋物語や、出会いや奇跡の漁りの物語などを書くことなど不可能だった¹⁹」……ここに綴られた「僕」の苦悩に寄り添うこと、すなわち、「不可能」の一語によって封緘された彼の欲望を理解することは、現代日本の読者にとって容易ではない。問題は、今日われわれの国で言われるような、戦争の語り部たちがいなくなってしまうことにあるのではない。まさしくその反対に、あらゆる物語行為が歴史のディスクールから逃れられないという事態が、いつまでもいなくなならない「歴史」こそが、一個の作家たることを願う「僕」の躓きの石となっているのだ。

この物語の「僕」は、「歴史」のアレゴリーとしての老人 —— *le Vieux* と大文字で綴られたこの者は、人間であると同時に形象であり、ほとんど神 (*le Dieu*) をも思わせる —— に押し潰された「不能な作家²⁰」を自認する。

る。モハンド＝アメル発言は以下の記事からの引用。Safia Ayache, « En Algérie, un enseignement exaltant “l'héroïsme du peuple” », *Le Monde Afrique*, 22 janvier 2021.

¹⁸ 解放戦争の歴史の記述作業は、戦争体験者の高齢化と戦後生まれの若い世代の増加をみた 80 年代のベンジェディード政権下において、国家主導で着手されることになる (Benjamin Stora, *La Gangrène et l'Oubli*, Paris, La Découverte & Syros, 1998, p. 302-305)。注 17 で確認したように、戦争の歴史記述がナショナリズムの形成と不可分であることを考慮に入れるなら、真の対立は国家と個人（「僕」）の間に生じていると言うべきであろう。

¹⁹ Kamel Daoud, « La préface du nègre », *op. cit.*, p. 65, 66, 67.

²⁰ *Ibid.*, p. 72.

代書人とはこの「不能」の烙印を押された者のことであり、老人の葛藤と同じく「僕」の葛藤もまた、彼個人のものではなく世代的なものとしてある。「独立後に書かれたすべての小説は、無為と、己の永遠性に興味を失った死者たちの退屈な産物でしかなかった²¹」という「僕」の言葉は、独立以降に生まれた作家たちにとってこの国の歴史がいかに払拭し難い「呪い」であり得たかを挑発的に示しているだろう。

だが、代書人は作家ではないし、作家は歴史家ではない。作家の営為は、過去に囚われたこの退役軍人の証言を、預言者ムハンマドとの血縁を主張して憚らないこの老人の古ぼけた啓示を、一字一句違わず筆写することではない。「僕」の存在を必要としなかった宇宙を隅々まで照らすことではない。今日のアルジェリアにおいて作家であること、それは、何人も歴史から逃れられないという認識の中で、それでもなお歴史とは異なる書物を「僕」の名のもとに書こうと試みることを意味するだろう²²。

「ニグロの序文」が問うているのはただひとつ、「歴史をよそに物語を書くことは可能か？」という問いである。換言すれば「「僕」は物語を書けるのか？」という問いである。われわれはこの点を確認したうえで、『ムルソー再捜査』に立ち戻ることとしよう。

5. 歴史からの遁走

本章を開始するにあたり、あらかじめその論点を先取すれば、『ムルソー再捜査』の主人公は「ニグロの序文」の主人公の同類であると言うことができる。彼らは同じ困難のなかで、同じ抵抗を試みている。「ニグロの序文」の「僕」は、彼自身のものでない、老人の「歴史」を背負わされつつも、そ

²¹ *Ibid.*

²² 『アルジェリア小説家辞典』の編者によれば、今日のアルジェリア文学は「証言」の文学から「想像力」の文学へ舵を切りつつある。「アイデンティティの問題はもはやアルジェリアの小説家たちをかつてほど執拗に悩ませるものではない。彼らは自由と想像とともに、そしてその多くはある種の勇氣や怒りとともに、自己自身を表現することを渴望する創造者たちなのだ。こうしている間にも、最も厳密な意味での想像力の文学こそが、証言に明け暮れることを拒む多くの作家にとっての特権的な表現の場となりつつある。 […] 「戦士たち」は芸術家たらんとする者たちに徐々に取って代われつつあるのだ。」Salim Jay, *Dictionnaire des romanciers algériens*, Paris, Serge Safran, 2018, p. 8.

こから逃れようとしていた²³。ハールーンも同様に、しかし異なる方法で、その身にのしかかる「歴史」からの不可能な遁走を試みるのである。

1962年7月3日、アルジェリアの独立がフランスによって正式に承認され、2日後の7月5日に独立宣言が発表される。すでに述べたとおり、ハールーンがジョゼフ・ラルケを殺害したのはこの日であり、ゆえにハールーンの解放とアルジェリアの〈解放〉は不可分であるように思われる。だが彼は、まさしくこの日に殺人を犯したことによって、祖国とともに〈解放〉される資格を決定的に喪失するのである。以下は殺人後の事情聴取における彼と将校のやりとりである。

「そのフランス人だって、われわれとともに殺すべきだったんだ、今週じゃなくて戦争中にな！」 僕はそれには大した違いはないと答えた。たぶん狼狽したのだろう、彼は黙り、それから怒鳴った。「大違いだ！」 彼は敵意のこもった眼をしていた。僕は何が違うのかと聞いた。彼は口ごもりながら、ただ殺すのと戦争をするのでは違いがあり、我々は人殺しではなく解放者であり、誰も僕にそのフランス人を殺すように命令をしておらず、それに〈もっと前〉にやるべきだったと言った。「もっと前とは？」、と僕は尋ねた。「七月五日より前だ！ そう、前にだ、後じゃない、分かったか！」 […] 「それで？」、と将校は僕に尋ねた。僕は理解できないと答え、「もし僕が七月五日の午前二時にラルケ氏を殺した場合、なお戦争だったと言うべきでしょうか、それともすでに〈独立〉していたと言うべきでしょうか。前なのでしょうか後なのでしょうか？」、と尋ねた (148-149)。

自分がフランス人を殺したのが戦時下であろうと独立後であろうと「それには大した違いはない」とハールーンは述べる。これは、ムルソーの口調を模した詭弁でしかない。彼はその時差が何を意味するかを確かに理解しているからである（「僕がここにいるのは、殺人を犯したためではなく、しかるべきときにそうしなかったためだということをも自分でも分かっていた (145-146)」）。

彼がジョゼフを「しかるべきときに」殺さなかったことには理由がある。「しかるべきとき」、すなわち戦争中にフランス人を殺した場合、何が起きるか。そのとき彼の殺人は、「アルジェリアのため」という大義を否応なく与えられ、彼の存在は、祖国のために戦った「国民」(le peuple) という集

²³ 「僕」は老人が口述する物語にそれとは異なる物語を紛れ込ませようとする。最終的に老人は死の直前に「僕」が筆写した原稿を燃やしてしまい、残されたのは老人が語る「歴史」ではなく「僕」が書いたこの「序文」であった。

合名詞に回収されることになる。そしてジョゼフもまた、戦時中に殺された「アルジェリアのヨーロッパ人」という一般名詞に回収されることを避けられない。つまりハールーンは、ムルソーが「アラブ人」にそうしたように、「名前を持たない者」を殺したことになる。

だが、彼の行為がムルソーに対する正確な同害報復ではないことを、彼が加害者との正確な対称性を拒絶したその理由を、われわれはすでに確認した。ハールーンの復讐は、「アルジェリアのため」ではなく「ムーサーのため」に、アルジェリア国民ではなく彼個人の名において、名前を持たない「フランス人」ではなく名前を持つ「人間」に対して、成し遂げられねばならない。さもなくばそれは「彼の」復讐にはならない。この「人殺し」はそのことを知っているからこそ、みずからを「解放者」とする戦争への参加を拒み、その終結を待ったのである。

2つの出来事の間にある僅かな時差が示しているように、ハールーンは歴史から逃れようとする。「ニグロの序文」の「僕」が、老人の語る歴史のうちに彼自身の言葉を紛れ込ませることによって抵抗を試みていたように、ハールーンもまた歴史と自身の間に僅かな時差を差し挟むことによって、紙一重でこれを躲そうと試みるのである。

6. 「われわれ」からの遁走

ハールーンの殺人は歴史の背後でひっそりと行われた。このことは、歴史への参加を拒否する彼の意思表示とみなすことができる。しかしまた、彼の復讐が「国民」ではなく彼「個人」の名において果たされねばならなかったことを想起するならば、歴史への不参加は同時に「集団」への不参加をも意味していると言えるだろう。このことは、たとえばハールーンの宗教観において顕著である。

宗教というのは、僕にとっては自分の乗らない集団交通機関みたいなものだ。僕だってこの神様のもとに行きたいし、必要なら歩いて行くけど、団体旅行はごめんだね。僕が金曜日嫌いなのは〈独立〉以来だと思うな(95)。

ハールーンは敬虔なムスリムではない。その理由は彼が無神論者だからではなく、信仰のもとに同質の集団を形成する宗教の全体主義的性格のためである。日曜日を嫌ったムルソーと対照的に、ハールーンは金曜日を忌避する。

この置換はそれぞれの文化圏における機械的な対応関係を示すだけでない²⁴。彼が金曜日を嫌う理由は、それがイスラーム教における集団礼拝の日、すなわち人々を集める日（アラビア語で「金曜日」を意味するジュマは、「集める」という意味の動詞ジャマアの名詞形）に該当するからである²⁵。アルベール・メンミは集団礼拝を「圧力釜²⁶」に例えたが、ハールーンが「僕が金曜日が嫌いなのは（独立）以来だと思ふな」と言うとき、金曜日は誰もがこの「圧力釜」に飲み込まれる日、すなわち、個々人が自身の「独立」から最も遠ざかる日を意味している。

ハールーンは金曜日を、集団を忌避する。すなわち「われわれ」（nous）を忌避する。『ムルソー再捜査』において、「われわれ」は主に3つの指示対象を持つと考えられる。1つ目の「われわれ」は、いま確認した信仰を紐帯とする宗教的共同体を指す。2つ目の「われわれ」は、ハールーンが解放戦争に参加しなかったことを糾弾する将校の言葉の中に見られる。

そのフランス人だって、われわれとともに殺すべきだったんだ、今週じゃなくて戦争中にな（148）！

すでに述べたように、ハールーンが「戦争中に」ジョゼフを殺さなかった理由は、ムーサーの名誉を回復するためであった。国の未来よりも兄の過去

²⁴ アルジェリアでは1976年の政令によって休日が日曜から金曜（イスラーム教における聖なる日）に変更された。この変更は70年代におけるイスラーム化政策の一環として行われたものである。この点については以下を参照。パンジャマン・ストラ『アルジェリアの歴史』小山田紀子・渡辺司訳、明石書店、2011年、435-438頁。

²⁵ いまひとつの理由として、金曜日はフライデー、すなわち『ロビンソン・クルーソー』において文明人ロビンソンによって便宜的にそう名づけられた野蛮人フライデーを含意することが挙げられる。このデフォーの小説はダーウドのきわめて重要なライトモチーフのひとつであり、彼は本作のみならず、折に触れて西洋世界／アラブ世界の文化的差異をロビンソン／フライデーになぞらえる。この図式はそれ自体あまりに多くの論点を含むために稿を改めて論じる必要があるが、本章で検討する「われわれ」（nous）の一語との関わりで言えば、本作に見られる「今日は金曜日（98）」（*Nous sommes vendredi*）という表現のうちに、「われわれはフライデーである」という隠喩性を読み取らないことはほとんど不可能である。

²⁶ 「金曜日の折りのための集会は、どのイスラーム国でも、政府によって奨励されないまでも、許可されている。集会は圧力釜のようなものだ。熱したイマームが、説教に形を借りた驚くほど激しい演説で、信徒たちの不満と怒りと要求を表現し、鎮める」（アルベール・メンミ『脱植民地国家の現在』菊地昌実・白井成雄訳、法政大学出版局、2007年、57頁）。西欧への怨恨に囚われたアラブ世界を批判しイスラームの相対化を唱えたアルベール・メンミは、ダーウドの思想的先駆者と言えよう。この点についてはダーウドによるメンミの追悼記事を参照。Kamel Daoud, « Avec Memmi, contre l'oubli », *Le Point*, 4 juin 2020, p. 102.

を優先するため、言い換えれば、歴史から物語を守るためであった。だが彼が解放戦争に参加しなかったことは、この将校の言う「われわれ」、すなわち、アルジェリア独立のために一丸となって戦う国民共同体としての「われわれ」からの離反をも意味しているだろう。

以上簡潔に整理した2つの「われわれ」は、めいめいにその外延を異にしている。しかしながら、ハールーンが金曜の集団礼拝に参加しないことと戦時下にフランス人を殺さなかったことは、「集団からの独立」という同一の信念に基づく行動であると言うことができる。

残る3つ目の「われわれ」は、ハールーンを最も脅かすものとしてある。それは、不特定多数の人間によって構成される上記2つの「われわれ」とは異なり、ハールーンとマーの2人からなる「われわれ」、つまり家族という共同体を指す。小説前半、ムーサーの手掛かりを探してフランス人街に足を踏み入れたマーとハールーンは、あるフランス人の家を訪れる。

それからマーが、僕のことは気にしないまま、通りを渡って決然として扉を叩いた。フランス人の老女が開けにきた。逆光のせいでその婦人は相手がよく見えなかったが、額に手をかざして、じいっと眺めていた。すると僕には、不安、不可解、終いには恐怖がその顔に書き込まれるのが見えた。彼女は赤くなって眼には恐れを宿し、いまにも叫び出しそうだった。僕はそのとき、マーがこれまで口にした中でもっとも長い呪いの言葉を彼女に吐きつけている最中であることを理解した。彼女は踊り場でとり乱しはじめ、マーを押し返そうとした。僕はマーの心配をし、僕ら (nous) の心配をした (66)。

ムーサーをめぐる事件とはおそらく何の関係もないこのフランス人老女に向かって、半狂人となった母がかつてない呪詛の言葉を浴びせるとき、息子の念頭に亡き兄への思いはもはやない。あるのはただひとつ、母に対する恐怖 (peur) である。「僕はマーの心配をし、僕らの心配をした」 (*J'eus peur pour M'ma, j'eus peur pour nous*) というこの一文は、ほとんど「僕はマーが怖かった、われわれが怖かった」 (*J'eus peur de M'ma, j'eus peur de nous*) と読み換えることができる。いずれにせよ、「僕」 (je) にとって「われわれ」 (nous) が懸念材料としてあるという点で、この一文は徴候的である。「僕」はここで、「われわれ」の中に組み込まれつつも、その外側から思考している。この表現において、「僕」は「われわれ」の内部にあると同時に外部にその身を置いている²⁷。

²⁷ ここに見られる *je* と *nous* の関係について、ダーウドは筆者の問いに以下のように答

本作におけるこれら3つの「われわれ」のうち、ハールーンに対してその拘束力を最も発揮するのは、宗教や民族ではなく「母」という紐帯である。そのことは、「僕ら (nous) のところでは、母親ってのは世界の半分なんだ (56)」という一文からしても計量的に明らかである。

事実、ムーサーの死後、ハールーンはマーによって最も重要な自由を、「自己自身である自由」を奪われることになる。

前にも言ったが、ムーサーの遺体はまったく見つからなかったんだ。

母さんはその結果、僕に厳しい輪廻転生の義務を課した。そうして僕が少しばかり遅くなるや、たとえ大きすぎようとも、故人の服を——彼の肌着やシャツや靴を——僕に着させたんだ。それが擦り切れるまで。僕は彼女から離れてはならなかった。[...] 僕の身体はそれゆえ死者の〈跡〉となり、僕はこの無言の厳命に服すこととなった (62-63)。

宗教的共同体と民族的共同体が「僕」のアイデンティティを集団のうちに「埋没」せしめるものであったのに対し、この家族的共同体、マーと「僕」の間でのみ成立するこの「われわれ」は、明らかに異質である。ムーサーを失ったマーが不条理な現実を修正するために必要としたのは、無数の作り話だけではない。彼女はもうひとりの息子ハールーンにムーサーの役を演じさせることで、つまりは彼を自身が作り上げたフィクションの犠牲にすることで、現実を埋め合わせようとしたのである。そしてまた彼女は、ハールーンにフランス人殺害を命じることで、彼に倒錯したムルソーの役をも演じさせていたことを想起する必要がある。ハールーンは、最も愛する人間に強いられたこの二重の役割によって、母が演出するこの二重の虚構のなかで、みずからのアイデンティティを「剥奪」されるにいたるのである。

えている。「アルジェリア社会は〈私たち nous〉が〈私 je〉に先立つ社会です。すべての決定権は個人ではなく集団にあります。もしあなたが〈私たち〉ではなく〈私〉の名のもとに意見し、自分の個性を主張しようとすれば、たちまち集団から裏切り者扱いされる。「フランス人」扱いされる。そこでは〈私〉は絶対に認められないのです。ハールーンと母親は一蓮托生で、彼女の身に起こることは彼の身にも降りかかる。しかしここには「家族という掟からいかにして自由になるか？」という大きな冒険があります。作家や知識人がみずからの自由を問い求めるときにもやはりこの図式が頭をもたげてくる。そこにはつねに集団による告発があるからです」(「カメル・ダーウド 文学の力、アルジェリアの今」『ふらんす』、2020年1月号、65頁)。この点については以下も参照。Kamel Daoud, « Le procès permanent du “je” par le “nous” », dans *Mes indépendances*, op. cit., p. 441-442.

事実、物語が進むにつれ、ハーレーンの問いの中心は「ムーサーは誰か？」から「僕は誰か？」という点にスライドしてゆく。殺人容疑で出頭を命じられた彼は、事情聴取ののちに釈放されたとき、次のように言う。

僕は説明もなく釈放されようとしていた、僕自身は断罪されたかったのに。僕の人生を暗黒に変えたあの重苦しい影を取り去って欲しかったのだ。それに、僕をこのように解き放ってしまうことには何かしら不正義なものがあった—— 僕が犯罪者なのか、人殺しなのか、死者なのか、犠牲者なのか、あるいは単なる躰のなっていない馬鹿者なのかも説明しないとは（150）。

彼が「断罪されたかった」理由は、犯した罪を引き受けるためではない。そうではなく「僕が何者であるのか（145）」を知るためである。「犯罪者」だろうと「死者」だろうと「馬鹿者」だろうと、それが彼の失われたアイデンティティを補完してくれるものであるかぎり、そこにはいかなる違いもない。

われわれは今や、この物語の核心に接近しつつある。カミュ＝ムルソーの物語に兄ムーサーの名が記されていないことへの義憤、それはハーレーンの出発点であって終着点ではない。彼が言うように、この小説は「ありきたりの赦しや復讐の物語」などではない。『ムルソー再捜査』は、ハーレーンが失われたムーサーの名誉回復を果たしたあとで、失われた自己自身を回復しようとする物語なのである。彼がその行方を「捜査」する真の対象は、彼自身である。

7. 物語からの解放、その失敗について

ハーレーンにとって、「われわれ」とは罍であり呪いである。そしてとりわけ、母と子の間にこの歪んだ「われわれ」を生む原因となった物語——それはムルソーの物語でありムーサーの物語でありマーの物語であり且つそのすべてである——もまた罍であり呪いである。かくしてハーレーンの呪いの正体が明らかとなったいま、われわれは、本稿の途中で宙吊りにされていた問いにようやく立ち戻ることができる。すなわち、ここからは「ハーレーンは彼自身の物語をどうするのか？」という問いに取り組むことができる。

ハーレーンが誰のものでもない彼自身の物語を生きるためには、それを妨げるものから、マーから解放される必要がある。ここで重要なのが、作品終盤に登場するメリエムという女性の存在である。ハーレーンにとってメリエ

ムは二重に重要な意味を持つ。彼女はまず、ムーサーの事件の真相が一向につかめないハールーンの前に、次の一言とともに現れる。

ムーサー・ウルド・エル＝アッサーズのご家族ですか（163）？

彼女は、ムーサーを殺した張本人であるムルソーがその犯行を綴った著書『もうひとり』（現実のわれわれにとってカミュの『異邦人』にあたる書物）の存在をハールーンとマーに明かす（彼女は研究者であり、この本についての博士論文を準備している）。そして第二に、この点に劣らず重要なのが、彼女はハールーンをマーから解放する可能性を秘めた唯一の存在であったことである。

僕の人生で、唯一恋物語と言えないこともないのはメリエムと過ごしたことだろう。彼女は僕を愛し、僕を生き返らせるだけの辛抱強さをもった唯一の女性だった。[…]メリエムは僕の母に挑戦しようとした唯一の女だった（97-98）。

ハールーンはメリエムと恋に落ちる。だが、彼らの「恋物語」を論じる紙幅はわれわれにはもはやないし、実際その必要もない。なぜなら、僅か数週間を共にしたのち、メリエムは彼のもとを去ってしまうからである。この失恋についてハールーンは述べている。「僕は呪われていたから、始めから、僕らの物語は終わりを迎えるだろうと、僕は彼女を自分の人生に留めることなど期待もできないだろうと分かっていたのだが（176）」。

彼らの物語が長続きしないことを分かっていたのは、ハールーンだけではない。本書の読者はみな、それを承知していたはずである。メリエムの登場は、あまりにも遅いのだ。全15章中第12章、もはや本文は全体の2割を切るという段階で、彼女はようやく物語に本格的に参入する。この遅すぎる登場はしかし、構成の不備などではまったくない。それは「この物語」において彼女の入る余地など初めからなかったということ、つまり、ハールーンの「呪い」がいかに強固なものであり得たかということを示す揺るぎなき証拠としてある。

同じことを別な尺度を用いて言えば、作中に92回も現れる *histoire(s)* という語のうち、彼自身のと無条件に呼び得る「物語」、彼をついに彼自身に還してくれる可能性を秘めたメリエムとの「物語」は、おそらく4つしかない²⁸。

²⁸ « la seule *histoire* qui ressemble un peu à une histoire d'amour est celle que j'ai vécue avec Meriem » ; « Depuis cette *histoire* avec Meriem » ; « j'ai su que notre *histoire* finirait » ;

それ以外の「物語」の大半は、ムーサー、ムルソー、マーをはじめとする者たち、彼を彼でなくした者たちに帰されるべきものである。メリエムはハーラーンを解放することのできなかつた未遂のヒロインである。ハーラーンの物語は、彼のものではない物語によって、初めからその可能性を奪われていたのである。

物語終盤、第13章の途中で不意に現れる大文字のMERIEMは、いったい何を意味するのか。章分けのための数字の他には章題らしきものが見当たらないこの小説において、唯一章題のようにポツンと置かれたこの6文字はいったい何を意味するのか。これは、この小説の題名であり得たかもしれないものの残骸である。ハーラーンに書くことのできたかもしれない「彼自身の物語」の盗まれた表題である。それはどこにでもある、取るに足らない恋物語であったかもしれない。だが問題は、その「どこにでもある、取るに足らない恋物語」を生きるための時間（頁）が彼の物語に残されていない点にあるのだ。「たとえば単なる恋物語や、出会いや奇跡の漁りの物語などを書くことなど不可能だった²⁹」という「ニグロの序文」の「僕」の困難は、ハーラーンのものでもあるのだ。

8. 名の不在、もうひとつの

本稿を閉じる準備を始めるために、われわれは『ムルソー再捜査』の出発点に立ち戻ってみたい。『ムルソー再捜査』は、『異邦人』の中に殺された「アラブ人」ことムーサーの名が記されていないことへの義憤から生まれた小説であった。つまり「名の不在」を主題とする小説であった。そして「名の不在」と言うとき、いまわれわれの念頭に浮かぶのは、ムーサーではなく、もうひとりの名の不在である。すなわち、ハーラーンの名の不在である。

作中に「ハーラーン」という語はほとんど記されていない。この小説の読者にとって、語り手の名が「ハーラーン」であるということはそれほど顕著な事柄ではない。彼が——正当な理由をもって——幾度となく繰り返す「ムーサー」という名に比べ、彼自身の名はその登場回数の少なさゆえにきわめて控えめな印象しか残さない。

« notre *histoire* n'avait duré que quelques semaines », dans Kamel Daoud, *Meursault, contre-enquête*, Arles, Actes Sud, 2014, p. 77, 143, 145. (強調引用者)

²⁹ Kamel Daoud, « La préface du nègre », *op. cit.*, p. 67.

むろん一人称小説という叙述形式を考慮すれば、作中に主人公の名が表れないことをことさら訝る理由などないだろう。しかしながら、本作『ムルソ一再捜査』がまさしく「名の不在」を極限まで前景化した地点に成立している作品である以上、主人公の兄ムーサーの名のみならず、主人公自身の名の有りや無しやもまた意識されてしかるべきではないだろうか。

事実、亡き兄ムーサーを除いては、ハールーンは作中人物から一度としてその名で呼ばれることがない³⁰。近所の子らは彼を「寡婦の息子（59）」と呼び、メリエムは彼を「ムーサー・ウルド・エル＝アッサースのご家族」と呼んでいた。ハールーンを彼のものでない物語から解放できる唯一の人物であったはずの彼女もまた、「ムーサーの遺族」というアイデンティティを彼に突きつけるのである。このことは、マーが彼に「ムーサー（あるいはムルソー）の代役」というアイデンティティを課していたことに劣らず象徴的である。愛する2人の女性にとって、彼はいつまでも誰かの影、「もうひとり」でしかないのだ。

そしたらそこで、僕は死ぬだろう、たぶん石打ちの刑で、しかしマイクを持ったまま、僕ことハールーン（moi Haroun）、ムーサーの弟、失踪した父の息子は（186）。

誰にもその名を呼んでもらえないハールーンは、ついにみずから名乗ることになる。ここで注目すべきは、彼が「僕ことハールーン」（moi Haroun）と言ったそばから「ムーサーの弟、失踪した父の息子」という肩書きを付言することで、自身のアイデンティティの補強を試みている点である。身近な人々にさえその名を呼ばれなかった彼は、自分の名を自分で信じていくことができないまま、物語は幕を閉じる。彼の置かれた状況は、たとえば『異邦人』の主人公と脇役たちの関係と比べてみると、いっそう明らかになる。

³⁰ 「おお、俺の兄弟ハールーンよ、どうしてお前はこんなことをされるがままにしているんだ？ 俺はおぼこの雌牛じゃあない、ちくしょう、俺はお前の兄貴なんだ！（18）」。ムーサーはすでに死んでいるためこれはハールーンの幻聴ではないが、以下に論じるように、この世界に存在しない人物だけが彼の名を呼んでいるという点で、この台詞はきわめて示唆的である。

レイモンは言った、「いざとなったら、マゾン、お前は二人目を頼む。俺は俺のやつを引き受ける。ムルソー、お前は (Toi, Meursault) 、もう一人いたらそいつを任せろ」³¹。

ムルソーとムーサー、ママンとマー、午後2時と午前2時、日曜日と金曜日……『異邦人』と『ムルソー再捜査』を取り結ぶ幾多の対称性のうち、もっとも決定的な対称性がここにはあるように思われる。すなわち、ムルソーの世界には「ムルソー、お前は」(Toi, Meursault) と呼びかけてくれる人がいるが、ハールーンの世界には「ハールーン、お前は」(Toi, Haroun) と呼びかけてくれる人がいないのだ。ムルソーには自分の名を呼んでくれる人がいる。そして、しかし、彼はその人をたぶん必要としていない。これに対して、ハールーンには自分の名を呼んでくれる人がいない。そして、しかし、彼はその人をたぶん必要としているのだ。

9. 物語からの解放、その真の可能性に向けて

ジョゼフの死によって、マーは生を取り戻し、物語から解放された。ハールーンに生を与えるのはジョゼフではない。彼を「ムーサー・ウルド・エル＝アッサースのご家族」と呼んだメリエムでもない。それはおそらく「彼の名を呼ぶ」ことのできる人物でしかあり得ない。

われわれはここで、やや唐突ながら、だがしかるべき理由をもって、本作の語りの形式を再度確認する必要がある。『ムルソー再捜査』は、ハールーンがオランのバーを訪ねた読者に語りかけるという叙述形式を取っている。本稿のはじめに見たように、この形式はカミュの『転落』からの借用である。そのことはル・モンド紙に掲載された本作の書評でも正しく指摘されている。

人生の黄昏時、男 [ハールーン] は『転落』(1956) の改検した判事ジャン＝バティスト・クラマンズよろしく、とあるバーで告白をする。その長い独白の聞き役となるのは、なんでも一介の「大学人」だという。彼は耳であり、それ以上でも以下でもない。それはわれわれの耳なのだ […] ³²。

いま問題とするのは、引用の後半部である。書評子はここで、本作の語り手の告白を聞く読者の存在は「耳であり、それ以上でも以下でもない」と言

³¹ Albert Camus, *op. cit.*, p. 172.

³² Macha Séry, « Kamel Daoud double Camus », *Le Monde des livres*, 27 juin 2014.

っている。しかし、ハールーンにとって読者は単なる「耳」でしかないと思
じるのであれば、それはまさしく彼の声に、たとえばわれわれに語りかける
彼の次のような声に、耳を傾けていないことになりはしないか。

君は若いけど、僕の裁判官にも検事にも傍聴人にも記者にもなってくれる (125)
……

彼を物語から解放することのできる人物は、物語の中にはいなかった。それ
は物語の外にいる。ハールーンにとって「読者」とは単なる「耳」ではな
い。それは、みずからの宇宙にはもはや縋ることのできる者がいないと悟っ
たこの語り手が最後に助けを求めた者の名である。ハールーンはクラマンス
ではない。彼は、人はみな転落者であるというボードレールの共犯性のうち
に読者を誘い込まんとする『転落』の語り手とは明確に異なる意図を持って、
われわれに語りかけてくる。彼をこの物語から解放することができるのは、
彼にとって絶対的な他者でありながら、しかし彼がどの作中人物に対するよ
りもはるかに親密に、ほとんど侵襲的な馴れ馴れしさをもって「君」(toi)
と語りかけることのできる、読者なのだ。事実、本稿において幾度となくそ
れをしてきたように、われわれだけが「彼の名を呼ぶ」ことができる。われ
われ読者だけが、ハールーンが誰の代わりでもない彼自身として確かにそこ
に存在することを、彼に対して肯定することができる。小説の読者を単なる
「耳」に還元することは、作中人物と読者、物語と現実の間にあるこの潜在
的な互酬性を忘れることである。

かつてエドワード・サイードは、植民地的無意識の中で形而上学に耽るカ
ミュ作品を批判し、植民地側からその「カウンターナラティブ対抗物語」を打ち出したフランツ・
ファノンの側に立ってみせた³³。『ムルソー再捜査』がサイードの言う意味
での「対抗物語」ではないことはもはや明白である。この小説は『異邦人』
を反転させただけの作品ではない。単に白と黒を入れ替えた作品ではない。
この作品が真に重要なことを語り出すのは、『異邦人』との反転性が築かれ
るときではなく、崩れ去るときである。この物語が『異邦人』の「対抗物語」
であることをまさしくやめようとするときである。すなわち、ハールーンが
「もうひとりの異邦人」であることをやめ、ムルソーそしてムーサーの影で
あることをやめ、ついに自己自身になろうと試みるときである。

³³ エドワード・W・サイード「被植民者を表象する」『故国喪失についての省察1』
大橋洋一・近藤弘幸・和田唯・三原芳秋訳、みすず書房、2006年、300頁。

僕は彼女 [メリエム] が本のページに置いた指を、紙の上を滑る赤い爪を眺めながら、もしその手を取ったなら彼女は何と言うだろうか、と考えるのを自らに禁じていた。しかし、ついには僕はそうしてしまった。するとそれは彼女を笑わせた。そのときの僕にはムーサーのことがどうでもよくなっていたのが分かっていただけのこと (172)。

カメル・ダーウドの作品には「物語は人を救う」という主題がある。それは主題というよりほとんど信念の域にある。物語が人を救うとすれば、この物語において、この物語によって真に救い出されるべきは、ムーサーではなくハールーンのほうなのだ。もし物語行為というものが「過去を物語る現在の行為によって、過去が現在の行為の方向づけを与え、そのことによって未来への期待を成立させる³⁴」行為だとすれば、『ムルソー再捜査』がわれわれに見据えることを求めているのは、ムーサーという過去ではなく、その過去に囚われたハールーンが到達できなかった未来のほうである。「呪い」や「罨」それ自体ではなく、その「呪い」や「罨」から解放された彼の先に待っていたはずの「物語」のほうである。本小説が今日的意義を持つとすれば、それはおそらくこの点に存すると思われる。

³⁴ 新田義弘「歴史科学における物語り行為について」『思想』、1983年10月号、80頁。この点については以下も参照。野家啓一『物語の哲学』、岩波現代文庫、2005年、173頁。